

第71回名古屋春栄会
演目のあらまし

令和8年2月1日

名古屋春栄会事務局

目 次

翁（おきな）	1
老松（おいまつ）	3
東北（とうぼく）	4
鼓ノ段（つづみのだん）〔箆太鼓（ろうだいこ）〕	5
春栄（しゅんねい）	6
羽衣（はごろも）	7
葛城（かずらき）	8
俊寛（しゅんかん）	9
熊野（ゆや）	10
松虫（まつむし）	11
春日竜人（かすがりゅうじん）	12
加茂（かも）	13
猩々（しょうじょう）	14
〔能のミ二知識〕	15

このリーフレットは、第71回名古屋春栄会の演目を解説したものです。

演目の記載順は、番組の順です。

詞章については、金春流の謡本から転載しました。

翁（おきな）

【作 者】 不詳

【登場人物】 シテ：翁（面・翁）、狂言：千歳、狂言：三番叟

【概要】（素謡の部分…シテが退場するところまで）

翁は「能にして能にあらず」と言われています。演劇性を持たない、天下泰平、国土安全、五穀豊穡を祈願する儀式としての舞のみの能です。翁、千歳、三番叟の3人がそれぞれ別に舞を舞います。颯爽たる千歳の舞、荘重な翁の舞と続き、その後、翁は退場し、千歳と三番叟の問答の後、三番叟が「揉之段」と「鈴之段」という2つの力強い舞を舞います。

【詞章】

シテ どうどうたたりたたりら。たたりらりらりらりどう。

地謡 ちりやたたりたたりら。たたりらりらりらりどう。

シテ 所千代までおわしませ。

地謡 われらも千秋さむらおう。

シテ 鶴と亀との齡にて。

地謡 幸い心にまかせたり。

シテ どうどうたたりたたりら。

地謡 ちりやたたりたたりら。たたりらりらりらりどう。

千才 鳴るは瀧の水。鳴るは瀧の水。日は照るとも。

地謡 たえずとうたり。ありうどうどう。

千才 たえずとうたり。たえずとうたり。

＜千才舞＞

千才 所千代までおわしませ。われらも千秋さむらおう。鳴るは瀧の水。

日は照るとも。

地謡 たえずとうたり。ありうどうどう。

＜千才舞＞

シテ あげまきやとんどや。

地謡 よばかりやとんどや。

シテ ざしていたれども。

地謡 まいろうれんげじや。とんどや。

シテ 千早ふる。神のひこさの昔より。ひさしかれとぞよわい。

地謡 そよやりちや。とんどや。

シテ 千年の鶴は。万才楽と歌うたり。又万代の池の亀は。甲に三極を備えり。

天下泰平国土安穩。今日のご祈祷なり。ありわらや。なじよの翁ども。

地謡 あれはなじよの翁ども。そやいつくの。翁ども。

シテ そよや。

＜翁舞＞

シテ 千秋万才の。喜びの舞なれば。一舞まおう万才楽。

地謡 万才楽。

シテ 万才楽。

地謡 万才楽。

老松（おいまつ）

【分 類】初番目物（協能＝老神物） *真ノ序ノ舞

【主人公】前シテ：老人（面・小尉）、後シテ：老松の神（面・石王尉）

【作 者】世阿弥

【あらすじ】（仕舞の部分...下線部）

都の西の方に住む梅津の某は、北野天満宮の夢のお告げを蒙り、筑紫国（福岡県）の安楽寺へ参詣することにします。はるばると旅をして、菅原道真の菩提寺である安楽寺へ着くと、老人と若い男がやって来て、梅と桜のことを述べ、花盛りの梅に垣を作ります。梅津の某は、彼等に言葉をかけ、有名な飛梅はどれかと問うと、神木であるから紅梅殿と崇めなさいとたしなめられ、同じく神木である老松についても教えられます。さらに梅津の某の頼みで、社殿の周辺の景色を述べ、松や梅が天神の末社として栄えていることを示し、中国では、梅は文学を好むので「好文木」といわれ、松は秦の始皇帝の雨やどりを助けたので「大夫」の位を授けられた故事などを教えたあと、神隠れします。

<中入>

おどろいた梅津の某は、供の者に土地の人を呼びにやらせ、その人から詳しく道真の事蹟や道真を慕って飛んできた梅、後を追ってきた松の話を聞きます。里人の勧めで梅津の某の一行は、松陰で旅寝をして神のお告げを待ちます。すると、老松の神霊が、紅梅殿に呼びかけながら登場し、のどかな春を祝って舞を舞い、君の長寿を祝い、御代の永遠をことほぎます。

【詞章】（仕舞の部分の抜粋）

さす枝の。さす枝の。梢は若木の花の袖。これは老木の神松の。これは老木の神松の。千代に八千代に。さざれ石の。巖となりて。苔のむすまで。苔のむすまで。松竹。鶴亀の。齡をさずくるこの君の。ゆくすえ守れと我が神託の。告を知らする。松風も梅も。久しき春こそ。めでたけれ。

東北（とうぼく）

【分 類】三番目物（鬘物） ＊序ノ舞

【作 者】世阿弥

【主人公】前シテ：都の女（面・小面）、後シテ：和泉式部の霊（面・小面）

【あらすじ】（仕舞〔キリ〕の部分…下線部）

東国より都へ上って来た旅僧が、東北院の和泉式部の住居跡を訪れます。折から花ざかりの一本の梅の木を見て、感じ入っていると、美しい一人の里女が現れて、話しかけてきます。そして、この梅は、今は「和泉式部」、「好文木」、「鶯宿梅」などさまざまに呼ばれているが、以前ここが上東門院の御所であった頃、和泉式部が植えて、「軒端の梅」と名付けたのだと、その由緒を語り、また、あの方丈は式部の寝所をそのまま残したものであると語ります。そして、花も、昔の主人である和泉式部を慕うかのように、年々に色も香も増して咲き続けているというので、旅僧が感心すると、自分こそ、この梅の主の和泉式部であると述べて、花の陰に消え失せます。

<中入>

旅僧は、門前の者からも和泉式部の物語を聞き、梅の木陰で夜もすがら読経します。すると、式部の霊が、ありし日の美しい上臈の姿で現れます。そして、昔、御堂関白藤原道長が、今あなたが読誦している法華経を高らかに誦しながら、この門前を通られるのを聞いて、「門の外 法の車の 音聞けば われも火宅を 出でにけるかな」と詠んだが、その功德により、死後、火宅の苦しみをのがれ、歌舞の菩薩になったと語ります。さらに和歌の徳や、東北院の霊地であることを讃え、美しい舞を舞って、やがて暇を告げて方丈に入ったかと思うと、僧の夢は覚めます。

【詞章】（仕舞〔キリ〕の部分の抜粋）

袖ふれて舞人の。かえすは小忌衣。春鶯囀という楽は。これ春の鶯。鶯宿梅はいかにや。これ鶯のやどりなり。好文木はさていかに。これ文を好む木なるべし。唐のみかどの御時は国に。文学さかんなれば。花の色もますます匂い常よりみちみち。梅風よもに薫ずなる。これまでなりや花は根に。鳥は古巢に帰るとて。方丈の灯を。火宅とや猶人はみん。こここそ花の台に。和泉式部がふしどよとて。方丈の室に入ると見えし。夢はさめにけり。見えつる夢はさめにけり。

鼓ノ段（つづみのだん）〔箆太鼓（ろうだいこ）〕 ——

【分 類】四番目物（狂女物） ＊カケリ

【作 者】不詳

【主人公】シテ：関清次の妻（面・曲見）

【あらすじ】（鼓ノ段の部分…下線部）

九州松浦の何某は家人の関清次という者が、他郷の者と口論の末、相手を殺害したので、捨てておけず、捕らえて牢に閉じ込め、下人に番を命じます。ところが、ある夜、清次は牢を破って逃げてしまいます。領主は清次の妻を呼び出し、夫の居所を尋ねます。女は知らないと言い張るので、判明するまで身代わりに入牢させます。領主は再び逃さないため、牢に太鼓を掛け、一刻ずつそれを打って番をするように下人に申し渡します。ところが女がにわかに狂気を起こしたようなので、牢から出してやろうとすると、この牢こそ愛する夫の形見だから出ないと言います。そのやさしい心を感じた領主は、夫婦ともに許すことにします。牢から出て来た女はそこに掛けてある太鼓を見つけ、古歌を引いて夫の身を案じ、中国の鼓の故事を歌いながらその鼓を打ちます。すると却って狂乱の態が増し、夫を慕うあまり、なつかしいこの牢を離れないと、再び牢の中に入ってしまう。領主は、あまりの痛々しさに深く心を打たれ、亡父十三年の追善にと夫婦の赦免を強く約し、神明に誓います。すると女は冷静になり、初めて夫の居所を明かし、自ら夫の許を訪ねて連れ戻して、仲睦まじく暮らします。

【詞章】（鼓ノ段の部分の抜粋）

鼓の声も時過ぎて。鼓の声も時過ぎて、日も西山にかたむけば。夜の空も近づく。六つの鼓打とうよ。五つの鼓はいつわりの。ちぎりあだなるつまごとの。ひき離れいづくにか。わがごとく忍び寝の。やわらやわら打とうよや。やわらやわら打とうよ。四つの鼓は世の中に。四つの鼓は世の中に。恋ということも。うらみということも。なき習いならば。ひとり物は思わじ。九つの。九つの。夜半にもなりたりや。あら恋しわがつまの。面影に立ちたり。嬉しやせめてげに。身代わりに立ちてこそは。二世のかいもあるべけれ。この箆出ずることあらじ。懐かしのこの箆や。あら懐かしのこの箆。

春栄（しゅんねい）

【分 類】二・四番目物（侍物） ＊男舞

【作 者】世阿弥

【主人公】シテ：増尾種直（直面〔ひためん＝素顔〕）

【あらすじ】（仕舞の部分…下線部）

増尾の春栄丸は宇治の合戦の際に捕われの身となって、伊豆国・三島の高橋権頭家次の陣屋につながれています。家次は春栄丸が自分の死んだ息子に似ているので養子にしたいと考えますが、既に斬罪の判決が下っていて今は刑の執行を待つばかりです。そうしたある日、春栄丸の兄・増尾太郎種直が家次の館を訪ね、春栄丸に面会を申し入れます。春栄丸は兄の来訪を喜びますが、肉親と知れては同罪になると恐れて、家来の者だと言い張ります。兄は弟と一緒に殺される覚悟で来たので、それでは情けないと言って腹を切ろうとします。ここに至って春栄丸も翻心し互いに名乗りあいます。委細を見ていた権頭は兄弟愛に涙を催します。そして種直に自分が春栄丸を貰うけたい由を話していると、鎌倉から囚人の断罪を命じられ、最期と覚悟をしていると、再び鎌倉より赦免が伝えられ、一同は喜び、種直は舞を舞い、春栄丸は家次の養子となって共に鎌倉に旅立ちます。

【詞章】（仕舞の部分の抜粋）

あずま路の。秩父の山の。松の葉の。千代の影そう。若みどりかな。若みどりかな。
若みどりかな。老木も若みどり。立つや若竹の。親子の契り。または兄弟。かれと
いいこれといい。いずれもいずれも睦ましく。親子兄弟と。栄うることも。これ孝
行を。守りたもう。三島の宮の。ご利生と伏し拝み。親子兄弟。さも睦ましく。う
ち連れて。鎌倉へこそ。参りけれ。

羽衣（はごろも）

【分 類】三番目物（鬘物＝精天仙物） ＊序ノ舞

【作 者】不詳

【主人公】シテ：天人（面・増女）

【あらすじ】（今回の仕舞〔キリ〕の部分…下線部）

駿河国（静岡県）三保の松原に住む白龍という漁師が今日も釣にやって来ます。そして、のどかな浦の景色を眺めていると、いい匂いがしてきます。あたりを見廻すと、一本の松の木の枝に美しい衣がかかっています。そこで、家宝にでもしようとして持って帰りかけると、一人の女性が現れて呼び止め、それは自分のものだから返してほしいと頼みます。その女性が天人であり、その衣が天の羽衣であることを聞かされた白龍は、そんなに珍しいものかと喜び、国の宝にしようと返そうとしません。天人は羽衣がなくては天に帰れないと、空を仰いで嘆き悲しみます。その姿があまりに哀れなので、白龍は、羽衣を戻すかわりに、天人の舞楽を見せてほしいと頼みます。天人は喜んで承知し、羽衣を着て月世界における天人の生活の面白さや、三保の松原の春景色をたたえた舞を舞いながら、天空へと上っていきます。

【詞章】（今回の仕舞〔キリ〕の部分の抜粋）

あずま遊びのかずかずに。あずま遊びのかずかずに。その名も月の。色人は。三五夜中の空にまた。満願真如の影となり。御願円満国土成就。七宝充満の宝をふらし。国土にこれを施したもう。さるほどに。時移って。天の羽衣。浦風にたなびきたなびく。三保の松原浮き島が雲の。足高山や富士の高根。かすかになりて天つみ空の。霞にまぎれて失せにけり。

葛城（かずらき）

【分 類】三番目物（鬘物） ＊序ノ舞

【作 者】不詳

【主人公】前シテ：里女（面・増女）、 後シテ：葛城の明神（面・増女）

【あらすじ】（仕舞の部分…下線部）

出羽国（山形県）の羽黒山から出た山伏が、大和国（奈良県）の葛城山へとやって来ます。折しも降りしきる雪に悩んでいると、一人の里女が現れ、彼女の庵に案内し、焚火をしてもてなしてくれます。そして、雪の中で集めて束にした木々の細枝を標〔しもと〕と呼ぶのだといい、「標結ふ葛城山に降る雪の、問なく時なく思ほゆるかな」という古歌もあると教えてくれます。山伏は好意を謝し、やがて後夜の勤行を始めようとする、女は、お勤めのついでに加持祈祷をして、自分の三熱〔さんねつ〕の苦しみを助けて下さいと頼みます。山伏は不審に思っ、その素性を尋ねると、自分は葛城の神であるが、昔、役〔えん〕ノ行者に命ぜられた岩橋を架けなかったため、不動明王の索に縛られ苦しんでいると云って消え失せます。

<中入>

そこへ麓の男がやって来たので、葛城山の岩橋の故事について尋ねます。その話を聞き、先程の女の事など思いあわせ、奇なことと思ひ、夜もすがら女神のために祈ります。すると、その修法にひかれて、葛城の神が現れ、三熱の苦を免れた喜びを述べ大和舞を舞い、明け方近くなると、岩戸の内へ姿を隠します。

【詞章】（仕舞の部分の抜粋）

高天の原の岩戸の舞。高天の原の岩戸の舞。天の香久山も向いに見えたり。月白く雪白く。いずれも白妙の。景色なれども。名に負う葛城の。神の顔かたち。面なや面はゆや。恥かしやあさましや。あさまにもなりぬべき。明けぬ先にと葛城の。明けぬ先にと葛城の夜の。岩戸にぞ入り給う。岩戸の内にぞ入り給う。

俊寛（しゅんかん）

【分 類】二・四番目物（人情物）

【作 者】世阿弥

【主人公】シテ：俊寛（面：俊寛）

【あらすじ】（今回の連吟〔クセ〕の部分…下線部）

平家討伐の陰謀が顛れて、俊寛僧都、平判官康頼、丹波少将成経の三人は、九州薩摩領の鬼界ヶ島に流されます。その後、中宮御安産の御祈禱のため、大赦が行なわれ、康頼・成経の二人だけが許されることになり、その赦免使が都を出立します。鬼界ヶ島では、康頼と成経が、島に勧請した熊野三社に参詣しています。俊寛は、自分は神信心をせず、二人の帰りを待ち受けます。そして、水桶の水を酒とみなして酌み交わし、互いに昔を思い起こし、今の境涯を嘆き合います。そこへ、都から使者の船が到着します。俊寛は、使者の差出す赦免状を康頼に読ませますが、自分の名がないので、読み落としかといぶかります。ついで自分で読んでみますが、やはり俊寛という名がないので、筆者の誤りかと疑います。しかし使者から、自分だけが許されていないということを知らされて、悲嘆にくれます。俊寛は諦め切れず、同じ罪なのにと嘆願しますが、その効はありません。俊寛は赦免状を何度も見直しますが、やはり名はありません。嘆き絶望して涙を流すばかりの俊寛でした。やがて、使者は二人を船に乗せて出発しようとしています。俊寛は、せめて向かいの地までと纜〔ともづな〕にすがりついて、必死の思いで乗船を願いますが、舟人はそれを振切って船を出し、俊寛の嘆きを残して、遠ざかってゆきます。

【詞章】（今回の連吟〔クセ〕の部分の抜粋）

時を感じては。花も涙をそそぎ。別れを怨みては。鳥も心を動かせり。もとよりもこの島は。鬼界が島と聞くなれば。鬼ある所にて。今生よりの冥途なり。たといいかなる鬼なりと。この哀れなどや知らざらん。天地を動かし。鬼神も感をなすなるも。人の哀れなるものを。この島の鳥獣も。鳴くは我をとうやらん。せめて思いの余りにや。さきに読みたる巻物を。またひき開き同じあとを。くり返しくり返し。見れども見れどもただ成経康頼と。書きたるその名ばかりなり。もしも礼紙にやあるらんと。巻き返して見れども。僧都とも俊寛とも。書ける文字はさらになしこは夢かさても夢ならば。覚めよ覚めよとうつつなき。俊寛がありさまを。見るこそ哀れ。なりけれ。

熊野（ゆや）

【分 類】三番目物（現在鬘物） *中之舞

【作 者】不詳

【主人公】シテ：熊野（面・小面）

【あらすじ】（今回の仕舞[クセ]の部分…下線部）

平宗盛は遠江国（静岡県）池田の長の熊野を愛妾として都に留めています。その熊野が故郷に残している老母が病氣となり、熊野の帰国を促す手紙を侍女の朝顔がたずさえて都に上って来ます。心弱くなっている母の様子に熊野は宗盛のもとに行き、その手紙を見せて暇を乞うことにします。熊野は宗盛の邸に行き、母の手紙を読み上げて、今一度母に会いたいと帰国を願いますが許されません。宗盛はかえって熊野の心を引き立てようと花見の供を命じ、牛車に乗って一緒に清水寺に向かいます。都大路の春景色にひきかえ、車中の熊野はひたすら母を案じており、清水に着いて車を降りると、まず観世音に母の命を折ります。やがて花の下で酒宴が始まり、熊野は宗盛の勧めで、心ならずも興を添えるためにあたりの風物を眺めながら舞を舞い、花の美しさをたたえます。ところが舞の途中でにわかに村雨が降り出し、花を散らします。熊野は舞をやめ、「いかにせん都の春も惜しけれど、馴れし東の花や散るらん」と歌を詠み、それを短冊にしたためて宗盛に差し出します。その歌を見た宗盛は、熊野の心を哀れに思い、東国に帰ることを許します。熊野は喜び、これも観世音のおかげと感謝し、宗盛の気持ちの変わらぬうちにと、その場から故郷に旅立ちます。

【詞章】（今回の仕舞[クセ]の部分の抜粋）

寺は桂の橋柱。立ち出でて峰の雲。花やあらぬ初桜の。祇園林下川原。南をはるかに眺むれば。大悲擁護の薄霞。熊野権現の移ります。御名も同じ今熊野。稻荷の山の薄紅葉の。青かりし葉の秋。また花の春は清水の。ただ頼め頼もしき。春も千々の花ざかり。

松虫（まつむし）

【分 類】四番目物（雑能） ＊男舞

【作 者】観阿弥原作、世阿弥改作

【主人公】前シテ：市人（直面）、後シテ：男の亡霊（面：真角）

【あらすじ】（仕舞〔キリ〕の部分…下線部）

摂津国（大阪府）阿倍野のあたりに住み、市に出て酒を売っている男がいました。そこへ毎日のように、若い男が友達と連れ立って来て、酒宴をして帰ります。今日もその男たちがやって来たので、酒売りは、月の出るまで帰らぬように引き止めます。男たちは、酒を酌み交わし、白楽天の詩を吟じ、この市で得た友情をたたえます。その言葉の中で「松虫の音に友を偲ぶ」と言ったので、その訳を尋ねます。すると一人の男が、次のような物語りを始めます。昔、この阿倍野の原を連れ立って歩いている二人の若者がありました。その一人が、松虫の音に魅せられて、草むらの中に分け入ったまま帰って来ません。そこで、もう一人の男が探しに行くと、先ほどの男が草の上で死んでいました。死ぬ時はいっしょにと思っていた男は、泣く泣く友の死骸を土中に埋め、今もなお、松虫の音に友を偲んでいるのだと話し、自分こそその亡霊であると明かして立ち去ります。

<中入>

酒売りは、やって来た土地の人から、二人の男の物語を聞きます。そこで、その夜、酒売りが回向をしていると、かの亡霊が現れ、回向を感謝し、友と酒宴をして楽しんだ思い出を語ります。そして、千草にすだく虫の音に興じて舞ったりしますが、暁とともに名残を惜しみつつ姿をかくします。

【詞章】（仕舞〔キリ〕の部分の抜粋）

面白や。千草にすだく。虫の音の。機織るおとは。きりはたりちょう。きりはたりちょう。つずり刺せちょうきりぎりすひぐらし。いろいろの色音の中に。別きて我が忍ぶ。松虫の声。りんりんりんとして夜の声。冥々たり。すはや難波の鐘も明方の。あさまにもなりぬべき。さらばよ友人名残の袖を。招く尾花のほのかに見えし。跡絶えて。草ぼうぼうたる朝の原の。草ぼうぼうたる朝の原。虫の音ばかりや。残るらん。虫の音ばかりや。残るらん。

春日竜神（かすがりゅうじん）

【分 類】五番目物（龍神物＝略協能） ＊舞働

【作 者】金春禅竹

【主人公】前シテ：宮守の翁（面・小尉）、後シテ：竜神（面・黒髭）

【あらすじ】（仕舞の部分…下線部）

山城国（京都府）、梅尾の明恵上人が中国、インドの地に渡ろうと思い、その暇乞いに春日明神に参詣すべく奈良にやって来ます。春日の里につくと、宮守の老人が現れて、明恵上人が唐、天竺へおもむくと聞いて驚きます。そして、かねてから春日明神は、明恵上人を太郎、笠置の解脱上人を次郎と呼んで、両手両足のように思し召して特別に守護しておられるのに、いま上人が日本を去っては、神慮に背くものであるといひます。上人は、霊地、仏跡を巡拝するためだから、神もおとがめにならないだろうと答えます。しかし、宮守は、釈迦が在世中の時ならば利益もあるが、入滅後の今日では、この春日山が釈迦が説法をされた霊鷲山であり、春日野が釈迦が悟りを開いた鹿野苑、比叡山は天台山、吉野、筑波は五台山を移したものであるからと、入唐渡天が無用であることを説き諭します。さすがに明恵上人も、これをご神託と思い、宮守の名を問います。老人は春日明神の使者、時風秀行と名乗り、上人が入唐渡天を思い止まるならば、誕生から入滅までの釈迦の一代記を見せようと言って消え失せてしまいます。

<中入>

やがて、春日野は、一面に金色の世界となって、八大竜王が百千の眷属をひきつれて現れ、他の仏達も会座に参会し、御法を聴聞するさまを見せます。上人がこの奇跡を見て、入唐渡天を思い止まると、竜神は姿を大蛇に変えて、猿沢の池の波をけたてて消え失せます。

【詞章】（仕舞の部分の抜粋）

八大竜王は八つの冠を傾け。所は春日野の月の三笠の雲にのぼり。地に降りて、飛火の野守も出でて見よや。麻耶の誕生、鷲峰の説法、双林の入滅。ことごとく終りてこれまでなりや明恵上人、さて入唐は。留るべし。渡天はいかに。渡るまじ。さて仏跡は。尋ぬまじや。尋ねても尋ねてもこの上嵐の雲に乗りて。竜女は南方に飛び去り行けば。竜神は猿沢の池の青波蹴立て蹴立てて。その丈千尋の大蛇となって。天に群り地にわだかまりて、池水を返して。失せにけり。

加茂（かも）

【分 類】初番目物 （協能） ＊舞働

【作 者】金春禅竹

【主人公】前シテ：水汲女（面・増女）、後シテ：別雷の神（面・大飛出）

【あらすじ】（仕舞の部分…下線部）

播州（兵庫県）の室の明神と都の加茂明神とは御一体であるというので、室の明神に使える神職が都へ上り、加茂の社に参詣します。すると、その川辺に新しい壇が築かれ、白木綿に白羽の矢が立ててあります。それを見て、不審に思い、ちょうどそこへ水を汲みにやって来た二人の女に尋ねます。女は「昔、この里に住んでいた秦の氏女が、朝夕この川の水を汲んで、神に手向けた。ある時、川上から白羽の矢が流れてきて水桶に止まったので、持ち帰って家の軒にさしておくと懐胎して男子を産んだ。この子と母、そして白羽の矢で示された別雷〔わけいかづち〕の神を加茂三社の神というのです」と、加茂三社の縁起を語ります。続いて、水を汲みながら川に因んだ歌をひき、その流れの趣を語り、やがて自分が神であることをほのめかして消え失せます。

＜中入＞

しばらくして、女体の御祖神〔みおやのしん〕が姿を現して舞をまい、続いて別雷の神が出現して、国土を守護する神徳を説き、猛々しい神威を示した後、御祖神は
糺の森へ、別雷の神は虚空へと飛び去っていきます。

【詞章】（仕舞の部分の抜粋です。）

風雨隨時の御空の雲居。風雨隨時の御空の雲居。別雷の雲霧をうがち。光稻妻の稲葉の露にも。宿る程だに鳴る雷の。雨を起して降りくる足音は。ほろほろ。ほろほろとどろとどろと踏みとどろかす。鳴神の鼓の。時もいたれば五穀成就も国土を守護し。治まる時にはこの神徳と。威光を現わしおわしませば。御祖の神は。糺の森に。飛び去り飛び去り入らせたまえばなお立ちそうや雲霧を。別雷の。神も天路によじのぼり。神も天路によじのぼって。虚空にあがらせ給いけり。

猩々（しょうじょう）

【分 類】五番目物（祝言物） ＊中ノ舞

【作 者】不詳

【主人公】シテ：猩々（面・猩々）

【あらすじ】（仕舞の部分…下線部）

親孝行で評判の高い高風という男が、揚子の市で酒を売ると富貴の身になるという夢を見、そのお告げのとおり酒を売って金持ちになりました。その高風の店に来て酒を飲む者で、いくら飲んでも顔色が変わらない者がいるので、ある日、名を尋ねると海中に住む猩々だと明かして帰って行きました。そこで、高風はある月の美しい夜に潯陽の江のほとりに酒壺を置き、猩々の出てくるのを待つことにします。やがて、猩々は薬の水とも菊の水とも呼ばれる銘酒の味をみたい、よき友と会うことを楽しみに、波間から浮かび出て、高風と酒を酌み交わします。折から空には月も星もくまなく輝き、岸辺の芦の葉は風に吹かれて笛の音を奏で、波の音は鼓の調べのように響きます。この天然の音楽にのって、猩々は舞い出します。そして高風の素直な心を賞し、汲めども尽きぬ酒壺を与え、消えていきます。

【詞章】（仕舞の部分の抜粋）

よも尽きじ。よも尽きじ。万代までの竹の葉の酒。汲めども尽きず。飲めども変わらぬ秋の夜の盃。影も傾むく入江にかれ立つ。足元はよろよろと。酔に伏したる枕の夢の。醒むると思えば泉はそのまま。尽きせぬ宿こそ。めでたけれ。

能のミニ知識

★能の分類

五番立て…能の催しは、一日に五番(五曲)が正式とされています。異なる雰囲気のを効果的に組み合わせるノウハウとして、神(神がシテ)・男(修羅に苦しむ男性がシテ)・女(美しい女性がシテ)・狂(狂女などがシテ)・鬼(鬼畜がシテ)の順に演じます。ただし、鬼がシテ(五番目物)であっても内容がめでたいため初番目に演じられる場合がある(略脇能物)など、完全に固定されているわけではありません。

○初番目物(脇能)

江戸時代の正式の演能では「翁」につづいて行われた能です。

神を主人公として、神社の縁起や神威を説き、国の繁栄を予祝し聖代を寿ぐ内容で、演劇性よりは祭祀性の強い作品です。

○二番目物(修羅能)

仏教では、戦にたずさわった者は修羅道に堕ちて苦しむといわれます。シテ(主に源平の武将の亡霊)が、旅僧の前に現われ、合戦の様子を見せ、死後の責苦を訴え、回向を願う作品です。

○三番目物(霊[かづら]物)

シテ(『源氏物語』など王朝文芸のヒロインや歴史上の美女、植物の精など)が、ありし日の恋物語などを回想し静かに舞を舞うという構成です。

全般に演劇性よりも舞踊性・音楽性が強く、能の理想美である幽玄の風情を追求した作品が多いです。

○四番目物(雑能)

他の分類に属さない能が、ここに集められています。

男女の「物狂物」、史上の武士を主人公とした「現在物」、非業に死んだ人の「執心・怨霊物」、中国人をシテとした「唐物」など、そのスタイルは多様です。また、他の分類に比べてストーリー性・演劇性が強い作品が多いです。

○五番目物(切[きり]能)

一日の番組の最後に置かれる能です。「ピン(一番)からキリ(最後)まで」のキリです。

見た目に派手でスペクタクル性の強いものが多いため、フィナーレとして演じられます。人間以外の「鬼畜や鬼神」の能、「竜神・天狗」の能、猩々・獅子・山姥など「精霊」の類や「貴人」の早舞物などがあります。

★能の楽器

囃子方[はやしかた]…能の楽器は、笛、小鼓、大鼓、太鼓の4種類です。

この楽器を演奏する人を囃子方といいます。

笛(能管):竹製、指穴七つの横笛です。唯一のメロディ楽器です。

小鼓:左手で右肩にかついで、右手で打ちます。

大鼓:左手で左膝にのせ、右手で打ちます。

太鼓:台に据えて、二本のバチで打ちます。

★略式の演能

素謡[すうたい]

一人または数人の謡によって能一番を聞かせるものです。演者は紋付袴姿で、シテ・ツレ・ワキ・地謡などに分かれて謡います。

江戸時代に入って一般に普及した上演形態です。

独吟[どくぎん]

謡の「聞かせどころ」を独演するものです。演者は紋付袴姿です。

連吟[れんぎん]

謡の「聞かせどころ」を複数で披露するものです。演者は紋付袴姿です。

仕舞[しまい]

能一曲のうち、クセやキリなどのシテの所作の「見せどころ」だけを舞うものです(通常 5 分程度)。シテは装束や面をつけず紋付袴姿で地謡(ボーカル)だけをバックにして舞います。仕舞扇をしますが、小道具、作り物(大道具)は原則として用いません。シテ一人で演じるのが普通ですが、特殊なものにシテとツレ、シテとワキ、ワキー人、ツレと子方で演じるものもあります。

鑑賞芸としての仕舞は、江戸初期になって成立したとされています。

舞囃子[まいばやし]

舞事・働事(囃子の演奏に支えられた能の中の一番の「見せどころ」)を中心に、シテが地謡と囃子(器楽)をバックにして装束や面をつけずに舞うものです。平均して 10~20 分程度の長さになります。長刀や杖などの手道具は用いますが、作り物(大道具)は省略します。

舞囃子は江戸初期に少しずつ上演される形式となりましたが、徳川五代將軍綱吉が愛好し、自身も舞ったことから元禄期に盛んになったとされています。

袴能[はかまのう]

面・装束を用いず、紋付袴姿で能を演じるものです。

半能[はんのう]

前場の大半を省略し、見せ場である後場を主体に演ずるものです。

独調[どくちょう]、独鼓[どっこ]、一調[いっちょう]

謡の「聞かせどころ」を、謡と小鼓・大鼓・太鼓の奏者それぞれ一人ずつで競演するもののことをいいます。

一管[いっかん]

笛の「聞かせどころ」を独奏するものです。

一調一管[いっちょういっかん]

打楽器のうち一種類と笛の二重奏の場合と、謡を加えて三人で競演する場合があります。

素囃子[すばやし]

舞事・働事などの部分を、囃子(楽器)によって聞かせるものです。

番囃子[ばんばやし]

謡と囃子(音楽的要素)のみで、能一番を聞かせるものです。

★舞事と働事

舞事[まいごと]…抽象的な純粹舞踊。音楽にも所作にも表意性はありません。

○序ノ舞: ゆったりとして、静かで典雅な舞です。美女の霊、女体・老体の精、貴公子の霊などが舞います。

○真ノ序ノ舞: 老体の神の荘重な舞。

○中ノ舞: 基本的な舞で、テンポは中ぐらいです。主に現身の女性が舞いますが、女体の神・精仙、遊狂僧の場合もあります。

○早舞: 拍子にリズムがあり、ノリのいい舞です。テンポは中ノ舞と神舞の中間ぐらいです。貴人や成仏した女性などがすがすがしく、典雅に舞います。

○男舞: 直面の現身の男(武士が多い)が舞う舞です。喜びや祝いの気持ちを表現して、速いテンポで勇壮闊達に舞います。

○神舞: 若い男体の神がテンポも速く、颯爽と舞う舞です。

○急ノ舞: テンポの速い、激しい舞です。鬼の化身やあらぶる神などが主に舞います。

○破ノ舞: 序ノ舞や中ノ舞の後に舞い添えられる短い舞です。

「舞事」の中でも、序ノ舞から急ノ舞に至る「舞ノ類」は、どれも旋律はほとんど同じです。急ノ舞に至るに従ってテンポが次第に早くなり、それに伴ってリズムが単純化する程度の違いしかありません。

これに対して次のものは、それぞれ固有の旋律を持っています。

○神楽[かぐら]: 「女体の神や神がかりした巫女」が幣を持って舞う舞です。
雅な感じの舞です

○楽[がく]: 舞楽のような感じの舞です。
中国の皇帝や童子などが舞う「異国風」の舞です。

○羯鼓[かっこ]: 羯鼓とは、腹につけてバチで打つ楽器のこと。
「遊芸者」がこの楽器を演奏しながら舞う様を模した舞です。

働事[はたらきごと]…「舞事」が抽象的な形式舞踊であるのに対し、「働事」は、ある程度表意的な所作をします。

○イロエ: 囃子に合わせて舞台を一巡する舞踊的な所作のことです。

○カケリ: 「修羅道の苦しみや物狂い、不安」などを表す所作のことです。
精神的な興奮状態、心の動揺や苦痛を表現します。

○祈り: 鬼女、悪霊が山伏や僧に祈り伏せられるというものです。
「祈祷と抵抗の一進一退」が表現されます。

○舞働[まいばたらき]: 龍神、鬼神、天狗、妖怪などが「威力を誇示」して猛々しく演ずる豪壮活発なる所作のことです。
働[はたらき]ともいいます。

このリーフレットの内容は、名古屋春栄会のホームページにも掲載しています。

<http://www.syuneikai.net>